個　人　研　究

附属中学・高校6年間を通じての学業成績の推移

大　西　誠一郎

I　問　題

附属学校には，現代のわが国が，一般の教育に関して解決しなければならない多くの問題が，その課題として与えられている。全国数多くの附属学校は，それらの課題に対して，さまざまな角度から取組んでいる。そしてその成果は，またさまざまな形で発表され，教育の推進に一つの役割をはたしているであろう。

本校における研究も，学部紀要や附属学校紀要に，あるいは各種の研究会，発表会等において，その成果を問いつづけている。

しかし，附属学校は，ただ研究にだけ専念することが許されない。毎日の生徒の指導は，一刻もゆるがせにできないことがらである。このように，附属学校は，外部に対しては〝研究〟校としての責務をおい，内部に対しては，日々の生徒〝指導〟としての任務をおっている。この〝研究〟と〝指導〟とをどう展開しうるかということは，一に学部の指導と，附属学校側の態度とにかかっていると言ってよいであろう。

さて筆者は，校長在任第三年目を迎えている。そこには，さまざまの問題があることに気付くし，それらを解明することは，現代ならびに将来の教育界にとっても大きい寄与をなしうるであろうと考えている。〝近代産業社会における人間の育成〟という目標は〝本校の10年来の課題としてその研究を進めて来た。そしてそのために具体的には〝教授過程を中心とし〟あるいは〝教育の生産性を高めるための教師・生徒の相互作用を中心として〟問題を検討して来た。それらの問題は，研究として進展しつつあり，教育界にもいろいろな問題点を投げかけることを期待している。その反面，とり残された問題と資料とがある。そして，もしもそれらに研究の光が投げかけられるならば，教育実践の上に一つの示唆を与えうるかも知れないと思うのである。

本研究は，むしろ後者に属するものなのである。すでに卒業して行った多くの生徒たちの，その折々の努力の結果が，学業成績として帳簿の上に書きこまれているのである。その一つ一つの数字は，それぞれの生徒が，あるいはよろこび，あるいは悲しんだ結果のしるしでもある。それぞれの生徒が，その時々に示した学業成績に対する一人一人の教師の評価なのである。筆者は今，それらの資料が倉庫の中にねむっているのを呼びさまし，それらの資料をもとにして，かれらの学業成績は，どのような推移をたどったかを調べようとしたのである。

したがってそれは，予め計画されたものではなかった。そのために，こうした資料もあればよかった，ああした資料もあればよかったと思う点もあるけれども，それらはすべてあとの祭りである。ここでは，すでにある資料をもう一度取り出して光をあて，教育心理学的な問題の解明に少しでも寄与できるならばと，考察を加えようとするものである。

そこで，本研究は，附属中学入学以後，中学あるいは附属高校卒業までの間に，生徒たちの学業成績はどのように推移したか，という点を中心として考察することにした。そのために，問題を次の4つに分けて整理した。

(1) 中学・高校における知能検査，進学適性検査，学業成績
(2) 中学・高校における各種成績間の相関
(3) 中学・高校を通じてみた各種成績間の相関
(4) 中学・高校および両者を通じてみた学業成績の変動

II　対　象

調査対象としては，昭和31，32，33年度附属中学へ入学して3年間在学した生徒，さらにひきつづきあるいは新たに附属高校に入学した生徒たちである。その調査対象となった生徒はTable 1のとおりである。

Table 1　調査対象

年次	中学			高校			中学・高校6年間在学		
中学入学～高校卒業	男	女	計	男	女	計	男	女	計
31～36	50	50	100	49	45	94	37	38	75
32～37	45	43	88	52	42	94	41	38	79
33～38	45	40	85	48	36	84	37	32	69
計	140	133	273	149	123	272	115	108	223

ここで調査対象とした生徒は，それぞれの学年において在学した生徒総数ではない。中学，高校それぞれ3年間を通じて在学した生徒，および，中学・高校6年間を通じて在学した生徒のみを対象とした。もちろん，このほかにも，学年中途で転出，転入した生徒がいる。それらの数は年度によって異なっているけれども，転出，転入は，中学ではのべ5～9名であり，高校では2～4名の範囲内であり，これらの生徒は，学年の進むにつれての学業成績の推移を見るという観点からは，除外することにした。

次に，中学・高校を通じて6年間在学した生徒の数は，Table 1のとおりである。本校は，中学入学に際しては，志願者の中から無作為抽せんによって100名を入学せしめている。高校入学に際しては，附属中学からの進学希望者と，外部中学からの志願者（無作為抽せんによって受験資格を得た者）に対して附属中学からの希望者とともに，同一問題による進学適性検査等を実施し，入学者を決定している。ただし，附属中学校からの志願者に対しては，6年間の追跡的研究という立場から判定の基準をかえているため，例年附属中学の卒業者は，8割ないし9割が入学を許可されている現状である。

さて，以上のような対象に関して集めた資料をもとにして，順次考察を進めたいと思う。

Ⅲ　結果とその考察

1　中学・高校における知能検査，進学適性検査，学業成績の結果

まず，中学在学3年間，高校在学3年間の学業成績，ならびに，中学入学時の知能検査，高校入学時の進学適性検査の結果について見よう。

ここで学業成績は，中学・高校とも，学年末評価得点をもってあてることにした。ただし，中学では9教科の綜合得点であるが，高校では8教科がさらに高校1年では14科目，高校2年，3年ではそれぞれ15，11科目にわかれて履習しているので，それらの綜合得点の平均をとることにした。得点は，5，4，3，2，1の5段階評定であるので，その得点をそのままの得点とした。

次に，知能検査は，名大式知能検査の得点であり，高校入学時の進学適性検査は，中学校の各教科にわたって出題した問題に関する得点である。その結果は，Table 2のとおりである。

(a)　まず，これらの結果を，男女別に比較してみると

Table 2　　IQ，進学適性検査，学業成績

	中学入学年次		IQ	中学（学業） 1	2	3	進適△	高校（学業） 1	2	3
男	31	平均	119.5	3.18	3.18	3.59	37.45	3.15	3.08	3.45
		SD	9.30	6.09	5.09	4.51	4.39	9.36	10.37	6.37
	32	平均	120.2	3.19	3.24	3.33	61.90	3.18	3.02	3.18
		SD	8.55	6.60	7.40	5.92	11.19	8.82	9.89	7.31
	33	平均	119.2	3.21	3.20	3.38	64.33	3.21	2.93	3.06
		SD	14.35	5.76	6.80	5.04	11.16	10.77	11.71	10.24
女	31	平均	118.8	3.25	3.20	3.83	35.49	3.05	3.03	3.43
		SD	9.60	5.93	6.19	4.70	4.84	9.83	9.52	6.18
	32	平均	121.0	3.37	3.16	3.36	57.71	3.07	3.06	3.49
		SD	9.35	6.06	6.64	6.24	10.00	9.95	10.45	7.93
	33	平均	122.4	3.13	3.14	3.23	56.36	2.94	2.70	3.16
		SD	12.70	3.93	5.60	5.56	6.69	7.30	8.43	5.83
計	31	平均	119.2	3.20	3.17	3.62	36.51	3.19	3.03	3.46
		SD	9.55	6.70	6.32	4.97	4.71	9.60	9.98	6.28
	32	平均	120.6	3.27	3.17	3.29	60.03	3.08	3.07	3.28
		SD	9.05	6.38	6.80	5.94	10.87	9.34	10.18	7.68
	33	平均	120.6	3.19	3.19	3.30	60.91	3.09	2.84	3.11
		SD	13.95	7.02	6.34	4.66	10.29	9.64	10.56	8.66

△ 進適の点数は，31年度は60点満点，32，33年度は100点満点である。

中学入学時の知能検査の結果については，各年次生徒とも，男女の間に有意差を認めることができない。また，中学入学後の学業成績に関しても，各年次とも，男女の間に一義的な差異を認めることはできない。

(b) 次に，高校については，進学適性の得点において各年次とも，男子の得点はつねに女子のそれよりもすぐれた傾向が認められる。しかし，高校入学後の学業成績の評価得点は，中学校同様，かならずしも一義的な差異を認めることができない。ただ，高校1，2年にあっては，男子の成績がややすぐれ，高校3年にあっては，女子の方がややすぐれるという傾向が認められる。

(c) 次に，中学，高校を比較しても，高校の評価得点がとくに低いということはない。本校ではすでに述べたように，附属中学卒業生の中，80〜90%が引きつづき高校へ進学しているのである。同じような条件によって，中学から高校へ進学したものが，どのように評価されているのか比較しうる資料を他に持ちあわせていないけれども，本校で中学，高校を一体として運営しているということが，教官の評価態度の上にも現われているのかも知れない。

原則的には，中学校は相対評価であり，高校は絶対評価ということを立前としているけれども，授業担任は，もちろん，その他学校運営のすべては全く一体的に経営していることが，このような結果を生んでいるのかも知れない。

ただ，高校においては，標準偏差が大きくなっている。これは，学力評価の上に個人差が大きくなることであるが，これはそのことだけに原因を求めることができない。中学と高校とは，評価される教科，科目数が異なることにもよるであろうが，そのことによる検討は，とくにとりあげないことにする。

(d) 最後に，Table 2の結果からみられることは，中学，高校を通じて，3年生の評価得点が高く，次いで1年生，2年生はやや低い評価がなされているという点である。これは，生徒自身の学習態度にもよるであろうし，教師の評価に対する態度にもよることが推測される。ことに卒業期をひかえて，〝甘く〟なることは，一般的にも考えうることである。

2　中学・高校における各種成績間の相関

さて次には，ここで得られた資料，すなわち，中学入学時の知能検査，高校入学時の進学適性検査結果および，中学1，2，3年，高校1，2，3年の学業成績相互の間に，どのような相関々係があるかを見よう。

今，それらの結果を示すと，Table 3のごとくである。なお，それらの結果は，すべて同一学年男女をいっしょにまとめている。また，同表に平均を求めているが，それはそれぞれの係数をZ変換して平均を求めている。

(a) これらの結果についてみると，中学，高校における各種成績間の相関には，かなり共通した傾向が認められる。

すなわち，中学入学時の知能検査結果と入学後の学業成績，および，高校入学時の進学適性検査結果と，高校入学後の学業成績との間には，ともにかなり高い相関が認められる。しかしその相関は，入学後の各学年間の学業成績相互間の相関より低い。

Table 3　中学・高校における各種成績間の相関

中学入学年次 ＼ 学年			31（学業）			32（学業）			33（学業）			平均（学業）		
			1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
中学	I Q		.50	.57	.32	.58	.58	.49	.57	.44	.43	.53	.53	.41
中学	学業	1		.83	.71		.88	.71		.89	.73		.87	.72
中学	学業	2			.72			.78			.80			.77
高校	進適		.56	.57	.49	.69	.64	.61	.79	.76	.66	.66	.63	.56
高校	学業	1		.91	.75		.92	.86		.92	.84		.92	.79
高校	学業	2			.77			.93			.84			.83

(b) 次に，中学，高校ともに，入学後の学業成績相互の間には，かなり高い相関を示している。ことに，隣接学年間，すなわち中1—中2，高1—高2の相関は，もっとも高く，次いで中2—中3，高2—高3間，そしてもっとも低いのは，1年へだった学年相互，すなわち中1—中3，高1—高3との間である。このことは当然予想されることであるが，入学後の学業成績の相対的位置関係は，少しづつ変化することを示すものである。

(c) 次に，知能検査と進学適性検査の，将来の学業成績との関係は，この資料に関する限りにおいては，進学適性検査の方がより高い相関を示している。ただし，この結果は，同じ対象に対して同時に両検査を実施したものでないから，これからただちに，進学適性検査の予見性が，知能検査のそれよりも高いと結論することはできない。

この点に関しては，すでに続有恒・中嶽治麿はじめ，本研究室の同人が，同じく附属中学校生徒を対象として詳細な研究成果を公にしているのであり(注1，2，3)，高校生を対象としても，おそらく同じ傾向が示されるであろうと思われることを付記するにとどめたい。

3 中学・高校を通じてみた各種成績間の相関

以上の考察は，中学，高校を別々に考えて来たものである。中学3年間，高校3年間を一つの単位として考察して来た。

しかし，すでにふれたように，本校は，中学入学以来引きつづき附属高校に進学するものがきわめて多数を占めている。もちろん，高校は中学とは別個の学校として一線を劃しているけれども，校長は一人であるし，教官はすべて兼任であり，指導の実際の上では，きわめて一体化されている。特別教室も体育館も，そして平常の行事も，同一歩調をとっている。制度の上では，6年制の学校ではないけれども，実質的にはそれに近い形態をとっている。しかも本校の研究目的の一つには，6年間の一貫教育が，どのような効果をもたらすかを考えているのである。

きびしい入学競争試験のないということは，一面，現代多くの学校に見られるように，受験準備学校化することなくてすむし，生徒間の友情はきわめて厚く，かれらは青春の力を十分発揮して，精神，身体両面にバランスのとれた活動を展開することができるのである。

毎年，金沢大学附属高等学校と，夏季に定期対抗競技大会を実施しているけれども，高校1，2年約200名の中，いわゆる選手として参加するものは120〜130名におよんでいる。選手のための競技ではなくして，まさに高校生全体の競技であり，身心の調和的発達という教育理想を実現するためには，恵まれた条件の中におかれていると言うことができる。もちろん，反面には弊害も考えられないことではない。しかしそれらは，現在の条件を生かす限り，克服しなければならない問題点である。

とにかく，中学，高校が，同じ体制のもとで指導されるということは，現代のわが国においては，むしろ数少ない例外的なものであるかも知れない。しかし，現実にわれわれはこの運営を続けて来たのであって，それが生徒の精神的，身体的両面に与える影響を検討することは，きわめて大切なことなのである。

しかし，筆者は今，直接その問題にふれることができない。ただ僅かに学業成績の面で，かれらがどのような推移をたどったかを示すにすぎないのである。しかし，その事実はまた，6年間引きつづき指導するという観点からも，いくつかの問題を提供しうるものと信ずるのである。

ただここで調査対象となるものは，中学，高校6年間を通じて在学したものであり，その数は，Table 1に示したように，31年度中学入学のもの男女計75名，同じく32，33年度中学入学のものそれぞれ79名，69名，計223名についてである。

さて，ここでは，まず各年次ごとに各種成績間の相関を求めた。ただ，これと同種のものは一部すでにTable 3に示したのである。そして，この2つの表に現われた値は，少しずつ異なっている。これはすでに述べたように，中学から附属高校へ進学するとき，一部生徒が他の高校へ進学し，新たに，比較的すぐれた生徒が高校に入って来ていて，Table 4，5の結果は，それらの生徒を除外して結果をまとめたためにいくぶん差を生じたものと考えられる。

また，Table 5は，IQ，進適，中学および高校の学業等，同種のものの相関係数をまとめて，年次別にその平均を示したのである。

(a) さて，これらの結果によってみると，各年次の生徒を通じて，ほぼ共通してみられる傾向がある。その傾向を，まずTable 4，31年度入学生徒についてみよう。

ここで，もっとも高い相関を示すのは，中学および高校の学業成績についての学年間の相関である。.79から.91の間にある。

次いで，中学入試のIQと中学入学後の学業成績，中学在学時の学業成績と高校入試の進適結果，さらに，高校入試の進適と高校の学業成績，この三者はほぼ同じ程度の相関を示している。すなわち，.40から.54の間にまたがっている。

そして最後に，もっとも低いのは，中学入試のIQと

Table 4　中学・高校を通じてみた各種成績間の相関

中学入学年次	学校種	学年	中学（学業） 1	2	3	進適	高校（学業） 1	2	3
31	中学	IQ	.45	.50	.40	.32	.27△	.30	.22
		学業 1		.79	.79	.45	.66	.56	.48
		学業 2			.87	.53	.77	.73	.63
		学業 3				.53	.85	.75	.67
	高校	進適					.54	.54	.48
		学業 1						.91	.79
		学業 2							.79
32	中学	IQ	.55	.52	.51	.44	.51	.58	.60
		学業 1		.88	.72	.69	.76	.75	.73
		学業 2			.81	.73	.84	.83	.81
		学業 3				.75	.89	.88	.85
	高校	進適					.74	.67	.66
		学業 1						.94	.89
		学業 2							.95
33	中学	IQ	.52	.39	.41	.18	.19	.16	.16
		学業 1		.84	.73	.55	.63	.59	.56
		学業 2			.84	.67	.78	.75	.70
		学業 3				.68	.74	.73	.65
	高校	進適					.83	.83	.69
		学業 1						.92	.83
		学業 2							.82

△　1％以下の危険率で有意差の認められないもの。Table 5 も同じ。

Table 5　中学・高校を通じてみた各種成績間の相関
—平均—

	中学入学年次	中学・学業	高校・進適	高校・学業
IQ	31	.45	.32	.26
	32	.53	.44	.55
	33	.45	.18	.17
中学学業	31	.78	.51	.69
	32	.82	.73	.82
	33	.78	.64	.69
高校進適	31			.52
	32			.69
	33			.85
高校学業	31			.84
	32			.93
	33			.89

高校入試の進適結果および，高校の学業成績間である。中学入試の時に行なった知能検査の結果から，高校入試における進適や，入学後の学業成績を予見することは，きわめて困難であることを示している。

(b)　なお，中学の学業成績と，高校の学業成績の相関9つの中，もっとも高いのは，高1と高3の .85であり，もっとも低いのは中1と高3の .48である。中学および高校のそれぞれ3年間においても，学業成績の相関は近接する学年間がもっとも高く，へだたっている学年間のそれが低いことは，すでに述べたところであるが，中学と高校との間についても，この関係は保たれている。しかもそれは，31，32，33年度各年次の生徒を通じて，例外なくみられる結果である。

(c)　以上の考察は，Table 4，31年度年次のものを中心として考察したことであるが，これらの特長は，32，33年度生徒についても，ほぼ同じように認められる。

ただ，32年度入学生徒については，中学入試のＩＱと高校の学業成績との相関がかなり高い。その原因がどこにあるかについては，この資料によっては明らかでない。

4　中学・高校，および両者を通じてみた学業成績の変動

最後に，学業成績が，個人によってどのように変動するかを検討しよう。

中学入学後，卒業に至るまで引きつづいて優秀な成績を示すものもあれば，入学当初は優秀であっても，次第に下降するもの，あるいは逆に，はじめは劣っていても次第に上昇するもののあることは，われわれの経験からも十分予想されうる問題である。

それは，高校在学中についても同様である。

さらにまた，中学と高校とを関連づけて考えても，その関係は考えられる。中学入学以来優秀な成績であり，それが高校卒業までつづくもの，または，中学では優秀であったが高校では下降するもの，あるいはまたその逆のもの，中学，高校ともに劣っているもの等々である。

ここではまず，中学，高校それぞれ3年間においてどのような変動を示すかを考察し，次いで，6年間を通じてどのように変動するかを見ることにする。

さて，それらの変動を見るために，それぞれの生徒が，各学年において占める位置を段階づけた。段階は5段階とし，まずそれぞれの学年の平均得点を中心として，±0.5ＳＤの範囲内にあるものを3の段階とし，さらにそれよりプラス，マイナスの方向へ1ＳＤをとり，それぞれの得点範囲内にはいるものを，4，5，2，1の段階とした。

4・1　中学，高校における学業成績の変動

以上のようにして学業成績の段階づけを行なったが，これをもとにして，成績の変動を次の4種に類別することにした。

1）不変型，成績段階が，3カ年を通じていつも同じもの，たとえば，1・1・1，3・3・3，5・5・5，など。

2）上昇型，1年時の成績段階よりも，2，3年時の段階値を合した方が2以上上昇しているもの。たとえば，1・2・3，2・3・3，3・4・5など。

3）下降型，1年時の成績段階よりも，2，3年時の段階値を合した方が2以上下降しているもの。たとえば，2・1・1，3・2・1，5・3・5など。

4）小変動型，以上以外のものを含む。したがって変動はするけれども，1年時の成績段階よりも2，3年時のそれを合した方が1だけ上昇あるいは下降しているもの。たとえば，1・1・2，3・4・3，2・1・2，4・4・5など。したがってここには，上昇的傾向のものも，下降的傾向のものも含まれている。ただその傾向が顕著でないというだけである。

以上のような類型にしたがって，中学，高校3年間の学業成績の変動を示すと，Table 6のごとくである。

以上の結果によって，中学，高校3年間の学業成績の変動を見ると，次のようである。

(a)　まず，中学においては，不変型がもっとも多く，年次，男女を合して全体の45.1%を占めている。小変動型がそれにつぎ29.3%，上昇型は17.9%，下降型はもっとも少なくて7.7%である。

(b)　次に，中学生において，男女を比較してみると，男子については，31年度入学生徒を除いて，上昇型が多

Table 6　中学・高校における学業成績の変動（%）

校種	変動型＼中学入学年次	31 男	31 女	32 男	32 女	33 男	33 女	計 男	計 女	計 男女計
中学	不変	50.0	44.0	51.1	39.5	35.6	50.0	45.7	44.4	45.1
	上昇	8.0	12.0	26.7	18.6	31.1	12.5	21.4	14.3	17.9
	下降	8.0	10.0	2.2	11.6	2.2	12.5	4.3	11.3	7.7
	小変動	34.0	34.0	20.0	30.0	31.1	25.0	28.6	30.0	29.3
高校	不変	67.3	68.9	68.5	55.6	52.8	50.0	62.8	58.3	60.9
	上昇	7.2	8.9	3.5	13.3	3.6	5.0	4.8	9.3	6.8
	下降	5.5	4.4	14.0	4.4	10.9	2.5	10.2	3.8	7.2
	小変動	20.0	17.8	14.0	26.7	32.7	42.5	22.2	28.4	24.9

く，女子についてはむしろ下降型が多いのが見られる。

女子の思春期的成熟が男子より早く現われることは一般的な現象であり，精神生活においても女子の成熟が早く現われる。この男女間の発達テムポのずれが，男女共学の学級では，女子にやや下降型の多い原因であるかも知れない。しかしそれは，後述する高校の結果とあわせ考えると，必ずしも妥当しないのであって，この資料に関する限りでは，その原因を明らかにすることはできない。

(c) 次に，高校生についても，一般的傾向は中学生のそれとほぼ同様である。ここでも不変型がもっとも多く次いで小変動型が多数を占めている。ただ，中学生よりも不変型が多く，上昇型は少ない。高校では全体として上昇型と下降型がほぼ同じ率を示している。高校にあっては，学業成績の段階が中学生のそれよりもやや固定して来ると見ることができよう。

(d) また，中学生にあっては，上述のごとく，男子には上昇型が多く，女子には下降型が多かったが，高校生には同じような傾向が見られない。むしろ高校生にあっては，32，33年度入学の男子に下降型のものの多いのが目立っている。

(e) 最後に，不変型はそれぞれの段階でつづくものであり，4，3，2，1の段階でつづくものがあるわけであるが，中学と高校についても，全体としてはあまり大きい差異がない。5，4，3，2，1の段階で3年間つづくものの比率を示すと，中学では 8.1，20.3，60.2，11.4，0％であり，高校では，それぞれ8.3，18.2，64.8，7.2，0.5％である。

4・2　中学，高校を通じて見た学業成績の変動

次に，中学，高校を通じて，学業成績の変動を見よう。ここでも，成績の変動は，不変型，上昇型，下降型，小変動型の4つにわけたが，次の点において条件をやや異にしている。

1) 不変型，中学3年間の段階が不変であったものが，高校3年間においても同じ段階値をもちつづけているもの。たとえば，（中学）2・2・2，（高校）2・2・2，（中学）4・4・4，（高校）4・4・4など。

2) 上昇型，中学3年間の段階値の合計よりも，高校3年間の段階値の合計が2以上上昇しているもの。たとえば，（中学）2・3・2，（高校）3・3・3，あるいは2・3・4など。

3) 下降型，上昇型とは逆にその差が2以上下降したもの

4) 小変動型，その他のものすべてが含まれている。中学の場合と同様である。

その結果は，Table 7のごとくである。

(a) さて，これらの結果によって見ると，全体として不変型のものが31.8％を占めている。中学，高校を通じて，学年における位置のかわらないものが約3分の1いるわけである。

また，上昇は全体として15.7％であるのに対し，下降は10.8％，小変動型はもっとも多く41.7％を占めている。中学，高校3年間だけの変動に比して，不変型がかなり少なくなることは当然であろうが，ここで，5の段階を中学，高校6年間維持しつづけているものは，男女合して7.1％，次いで，4，3，2の段階をつづけているもの，それぞれ14.0，70.5，8.4％の割合である。

(b) なお，全体として女子には，上昇型のものも，下降型のものも，ともに多いという傾向を示しているが，年次別についてみると，この傾向はかならずしも共通して現われていない。32年度中学入学の生徒には，女子に上昇型は多いが，31，33年度入学のものには，逆に女子に下降型のものが多い。学業成績には，さまざまな要因が作用しているために，現在の資料ではその原因を明らかにすることはできない。

Ⅳ　む　す　び

以上，昭和31，32，33年度に附属中学に入学して3年間在学した生徒273名，さらに引きつづきあるいは新たに附属高校に入学して3年間在学した生徒272名，なおそれらの中，中学，高校に引きつづき6年間在学した生

Table 7　中学・高校を通じて見た学業成績の変動（％）

変動型＼中学入学年次	31		32		33		計		
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男女計
不変	29.7	34.2	36.6	21.0	29.8	40.6	32.8	31.6	31.8
上昇	16.2	13.1	4.9	29.0	16.2	15.6	12.2	19.5	15.7
下降	8.1	15.8	4.9	7.9	10.8	18.8	7.8	13.9	10.8
小変動	46.0	36.8	53.6	42.1	43.2	25.0	47.2	35.1	41.7

徒223名を対象とし，かれらの学業成績を中心としていくつかの問題を考察した。

(a) まず第1は，中学，高校における入学時の知能検査，進学適性検査，さらに学業成績の結果について考察した。その結果，男女の間には，とくに一義的な差異を認めることはできない。また，高校入学時の進学適性検査得点は一般に男子がすぐれているが，入学後の学業成績には顕著な差がない。ただ，中学，高校ともに，3年生の評価は一般に高く与えられている。

(b) 第2に，各種成績の相関は，中学，高校とも，各学年の学業成績間の相関は高く，中学入試時の知能検査と中学入学後の学業成績間の相関はもっとも低い。また学業成績間の相関のうち，隣接学年間の相関は高く，学年がへだたると低くなる傾向がみられる。

(c) 中学，高校を通じてみた場合，上述の関係はほぼ保たれている。とくに，中学入学時の知能検査の成績と高校における学業成績との間は，その相関がもっとも低い。

(d) 第4に，中学，高校およびその両者を通じて学年成績の変動をみたが，中学，高校ともに，学年における成績段階の変化しないものはもっとも多く，小変動型のものがそれにつづいている。ただし，上昇型のもの，下降型のものもそれぞれ認められるが，高校においては，その成績変動が中学よりも少なく，やや固定する傾向が認められる。

(e) 中学から高校へ通じてみると，成績段階の変動しないものが約3分の1あるが，上昇型のものも下降型のものもそれぞれ16%，11%近く存在している。

以上は，学業成績を中心として，附属中学，高校に在学した生徒の資料の分析から得たものである。この研究は，予め計画して資料を集めたものでないために，十分考察のできなかった点も残されている。

(a) その点でまず反省されることは，ここに得られたものによっては，生徒の学年中における相対的地位はわかるけれども，学習結果がどのように進歩し発展したかは知ることができなかった。そのためには，客観的テストが実施されていたならば，さらに興味ある考察を進めることができたであろうと思う。

(b) 次に，学業成績は，各教科，科目の評価を同一に扱っている。すなわち，1週間2時間単位で与えられた授業も，1週間5時間与えられた授業の結果に与えられた評価も，同等の価値として取扱っている。中学については，英語，数学，理科，社会，国語の5教科とその他とをわけて考察するということなども企てられているけれども，この両者をあわせ比較することはさらに興味あることである。

(c) さらに，高校入学に際しては，一部外部中学からの生徒が加わっている。附属中学で3年間指導をうけたものが，引きつづき高校において指導をうけた場合と，新たな環境に入って3年間高校教育をうけた生徒の学業成績の推移を比較することはいろいろな意味から重要な問題である。筆者は，一部その問題について資料を整理しているけれども，今回はまだ公表の段階に達していない。適当な機会に，また考察を進めたいと思っている。

注1　続有恒　中学校卒業時における学業的成功の予見　名古屋大学教育学部紀要　第3巻　1957

注2　続有恒　生徒の将来の予見について　名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要　第2巻　1956

注3　中嶽治麿，山本輝夫　教育心理学的診断の予見性に関する追跡研究―知能検査について―　名古屋大学教育学部紀要　第4巻　1958

付記　本研究を進めるにあたっては，附属学校教職員ならびに本学部助手岩井勇児，木村捨雄等にいろいろ援助をいただいた。記して厚く感謝の意を表したい。（1964年7月）